

平成 27（2015）年度ニギス太平洋系群の資源評価

責任担当水研：中央水産研究所（梨田一也、赤嶺達郎）

参 画 機 関：愛知県水産試験場漁業生産研究所

要 約

本系群の資源状態について、太平洋中部の熊野灘における 1 そうびき沖底の資源密度指数に基づいて評価した。本系群を対象とする漁業種類は、太平洋中部・南部の沖合底びき網漁業（1・2 そうびき沖底）と愛知県の外海小型底びき網漁業である。本系群は太平洋中部および南部のほかに金華山以南の太平洋北部にも分布しているが、そこで操業する沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計資料の集計対象魚種にはなっていないため漁獲の実態については不明である。本系群の漁獲量は、1980 年代後半から増加し 1997 年には 1,977 トンと過去最高の水準に達した。しかし、その後は減少傾向が続き、2014 年には 594 トンと 1980 年以降で最低の漁獲量となった。1 そうびき沖底の資源密度指数の最近年の変動傾向をみると、太平洋中部で最も漁獲量の多い熊野灘の水準と動向は低位・減少となっている。これ以上の資源水準の低下を防止することを管理目標とし、平成 27 年度 ABC 算定のための基本規則 2-1) を適用し、太平洋中部（熊野灘）の資源密度指数を指標値に用いて、ABClimit を現状の漁獲量（2012～2014 年の太平洋中部・南部の全漁業種類の平均漁獲量 687 トン）・ $\delta_1 \cdot \gamma_1$ として算出した。2014 年の熊野灘の資源水準が低位であるため δ_1 は 0.7 とした。ABCTarget は ABClimit に 0.8 を乗じて計算した。

管理基準	Limit / Target	F 値	漁獲割合 (%)	2016 年 ABC (トン)
0.7・Cave3-yr・0.84	Limit	—	—	404
	Target	—	—	323

Limit は、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量である。Target は、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量である。ABCTarget = α ABClimit とし、係数 α には標準値 0.8 を用いた。

年	資源量 (トン)	漁獲量 (トン)	F 値	漁獲割合
2013	—	599	—	—
2014	—	594	—	—

水準：低位 動向：減少

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり

データセット	基礎情報、関係調査等
年別漁獲量	漁業・養殖業生産統計年報（農林水産省） 太平洋中部・南部沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計年報（水研セ）
資源量指数 ・資源量指数等	太平洋中部・南部沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計年報（水研セ）
漁獲努力量	太平洋中部・南部沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計年報（水研セ）

1. まえがき

本系群の主要な漁場は、太平洋中部（伊豆沖から熊野灘）・南部（紀州沖から薩南）である。本系群は太平洋中部・南部の沖合底びき網漁業の重要な漁獲対象種の一つであり、愛知県では外海小型底びき網漁業（以下、愛知県外海小底）による漁獲も行われている。愛知県以外の小底の漁獲については、統計値が未整備のため明らかではない。なお、当該海域において本種を漁獲対象とする外国漁船はない。

2. 生態

(1) 分布・回遊

本系群は、金華山から日向灘に至る太平洋沿岸の水深 100～450m に帯状に分布する（図 1）。金華山以南から房総半島沖の分布については、断片的な知見があるのみで詳細については不明である（Fujita et al. 1993）。土佐湾では本種の幼稚魚（被鱗体長 20mm 以上、以下、体長と称する）は、主に 4～6 月に水深 100～150m に着底し、8～9 月までその場に留まり、それ以降成長に伴って棲み場を深みに拡大しつつ、水深 150～250m 付近に分布する成魚群へ加入していく（堀川・阪地 1996）。水平的な移動・回遊の実態については、卵稚仔の輸送を含めてほとんど知見がない。

(2) 年齢・成長

熊野灘と紀伊水道沖および土佐湾では、満 1 歳で体長 130～150mm、満 2 歳で 170～190mm であり（羽生 1956、Nashida et al. 2007）、日本海系群より成長が速い（表 1）。寿命は日本海系群よりも短く、3 歳程度と考えられる（羽生 1956）。耳石を用いた年齢解析によると、高知県高知市御畳瀬の沖底の漁獲物の大部分（90%）が 2 歳魚であり、春生まれ群と秋生まれ群がほぼ同じ割合であった（片山・梨田 2010）。一方で、稚魚期の採集尾数は春生まれ群の方が秋生まれ群の 10 倍程度であり（Nashida et al. 2007）、成魚期になると、その比率が拮抗する原因についてはまだ明らかではない。

(3) 成熟・産卵

高知県漁業協同組合御畳瀬支所の 1 そうびき沖合底びき網漁業（以下、1 そうびき沖底）の水揚げ物（成魚）の生殖腺の KG 値（＝生殖腺重量（g）×10⁴／体長（cm）³）の季節変化をみると（図 2）、雌雄とも 2～3 月に顕著なピークが認められる。調査船調査により土佐湾で採集したニギス幼稚魚の採集尾数の季節変化から、少ないながら秋生まれ群も出現

することが確認されている（Nashida et al. 2007）。幼魚の耳石日周輪より逆算した孵化日のモードから、9月を除くほぼ周年にわたって産卵するが、春生まれ群は2～3月に、秋生まれ群は11～12月にかけて発生することが明らかになってきた（梨田 2010、梨田 2013）。以上から、土佐湾における産卵盛期は2～3月であり、11～12月にも産卵の小さなピークがあるものと考えられる。産卵は水深200～300mの海底付近で行われ、成熟開始年齢は満2歳と考えられる。

（4）被捕食関係

幼稚魚はカイアシ類を主に捕食するが、それ以降はオキアミ類が主体となる（堀川ほか 1992、堀川・阪地 1996）。捕食者は中・大型の底魚類と想定される。

3. 漁業の状況

（1）漁業の概要

ニギスの主要な漁獲水深は200～300mである。ニギス太平洋系群を漁獲対象とする主な漁業種類は、2014年においては多い順に1そうびき沖底、愛知県外海小底、2そうびき沖合底びき網漁業（以下、2そうびき沖底）である。これらの漁業で、ニギスを主要な漁獲対象種としているのは1そうびき沖底と愛知県外海小底である。

（2）漁獲量の推移

本系群の漁獲量について、太平洋中部・南部で操業する1そうびき沖底と2そうびき沖底および愛知県外海小底漁獲量を、図3、図4および表2に示す。

本系群の漁獲量は、1980年代前半は1,000～1,500トンであったが、1980年代後半から1,700トン前後に増加し、1997年には1,977トンと1980年以降で最高となった。その後減少して2003年には833トンとなり、2010年まで1,000トン前後で推移した。さらに2011年は632トンと前年比で7割まで減少し、2012年には一時的に867トンまで増加したが、2013年に再び減少に転じ、2014年は暫定値で594トンと1980年以降で最低となった。

1そうびき沖底による漁獲量は、1980～1997年では900～1,500トンの間を増減していたが、1998年以降減少して2004年には472トンとなった。2005年以降増加に転じ、2008年には807トンとなった。その後再び減少して、2014年には386トンと低水準である。近年、1そうびき沖底は漁獲量全体の59～75%を占めており、特に熊野灘と土佐沖の合計漁獲量は系群全体の44～60%を占めている。2そうびき沖底による漁獲量は、2002年に1980年以降最高の419トンとなった。これは、当業船がニギスの主漁場である土佐沖と紀伊水道沖で多く操業したことによる一時的な漁獲量の増大であり、その後の減船・廃業等により2007年には18トンにまで減少した。2014年の漁獲量は12トンであった。

愛知県外海小底による漁獲量は、1997年の616トンをピークに減少傾向となり、2014年には196トンで1997年の31.8%、前年比で105.9%であった。

太平洋中部での1そうびき沖底と愛知外海小底の漁獲量を太平洋中部の漁獲量、太平洋南部での1そうびき沖底と2そうびき沖底の漁獲量を太平洋南部の漁獲量とした（図5、表3）。中部では1989年の1,028トンをピークに数回の増減を繰り返しながら長期的には漸減傾向となっていたが、2008年以降に減少傾向となり2011年には364トンとなった。し

かし、2012年には594トンまで増加したものの、その後再び減少し2014年には401トンとなった。南部では1996年の1,127トンをピークに減少し、2005年には1980年以降最低の243トンとなった。その後、1そうびき沖底の漁獲量が漸増したためやや増加したが、2010年から再び減少傾向となった。2012年に1そうびき沖底の操業船が2隻から1隻になったものの272トンまで増加した。2013年には147トンと半減したが2014年には192トンとやや増加した。

(3) 漁獲努力量

中部の主要漁場である熊野灘と南部の主要漁場である土佐沖における1そうびき沖底の漁獲量、資源量指数等の統計値を、図6、7および表4、5に示す。熊野灘では、着業隻数は1980年の15隻から1997年に4隻まで減少したが、2002年以降は5隻となっている。有効漁獲努力量（総漁獲量/資源量指数）は1985～1988年に高い値を示したが、漁獲量とともに減少し、着業隻数が5隻となった2002年以降は2007年と2011年の一時的な減少を除けば横ばいとなっていた。2014年には前年に比べ4割減少した。土佐沖では、着業隻数は1980年には8隻であったが、2002年以降は2隻に減少し、2011年4月末で1隻が休業することになり、2012年からは1隻のみとなった。2013年11月から休業していた1隻が稼働するようになったが、機関故障等で十分に操業できなかった。その後、代船により2014年9月から復帰した。有効漁獲努力量は、1996年に最大となり、着業隻数が1隻となった2012年に最低となった。努力の有効度（有効漁獲努力量/総ひき網数）は熊野灘より土佐湾の方が高く、土佐湾でニギスを狙った操業が多いことを示している。両海域とも近年では、着業隻数は大きく減少し、有効漁獲努力量も低位となっている。漁獲量減少の主要な要因として、沖底の稼働隻数減少による漁獲努力量の低下が考えられる。

なお、資源量指数は小海区（緯度経度10分升目）ごとのCPUE（kg/曳網）を全漁区合算した値、資源密度指数は資源量指数を有漁漁区数で除した値である。

4. 資源の状態

(1) 資源評価の方法

2012年以降、土佐沖の1そうびき沖底の操業隻数が1隻となり、資源密度指数が資源状態を反映していないと考えられることから、熊野灘の1そうびき沖底の資源密度指数を系群全体の資源量指標値として資源状態を判断した（図8）。

(2) 資源量指標値の推移

熊野灘における1そうびき沖底の資源密度指数（図8）は35～129の間を増減しており、2008年以降は減少傾向を示している。2014年は59であった。

(3) 資源の水準・動向

資源水準は、熊野灘における1そうびき沖底の資源密度指数の最大値と最小値の間を三等分して高位・中位・低位とした（図8）。

5. 2016 年 ABC の算定

(1) 資源評価のまとめ

熊野灘における 1 そうびき沖底の資源密度指数（図 8）を資源量指標値とした。その経年変化から資源水準は低位、2010～2014 年の推移から動向は減少と判断した。漁獲努力量の減少も漁獲量減少の要因と考えられる。

(2) ABC の算定

平成 27 年度 ABC 算定のための基本規則 2-1) により、 $ABClimit = \delta_1 \cdot Cave \cdot \gamma_1$ とした。 δ_1 は資源状態によって決まる係数、 $Cave$ は近年（2012～2014 年）の系群全体の漁獲量の平均値、 $\gamma_1 = 1 + k(b/I)$ (k は係数、 b および I はそれぞれ資源量指標値の過去 3 年の傾きと平均値) である。 δ_1 は、資源水準が低位で $Cave$ を用いることから規則により推奨される 0.7 とした。資源量指標値として熊野灘における 1 そうびき沖底の資源密度指数を用いた。 γ_1 は、 $b = -10.11$ および $I = 63$ から 0.84 と算出された (k は基準値の 1)。これらの数値を用いて計算すると、系群全体として近年（2012～2014 年）の平均漁獲量が 687 トンであることから、 $ABClimit$ は 404 トンとなった。 $ABCtarget$ は安全率を見込んで $ABClimit$ の 8 割として 323 トンとなった。

管理基準	Limit / Target	F 値	漁獲割合 (%)	2016 年 ABC (トン)
0.7・Cave3-yr・0.84	Limit	—	—	404
	Target	—	—	323

Limit は、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量である。Target は、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量である。 $ABCtarget = \alpha ABClimit$ とし、係数 α には標準値 0.8 を用いた。

(3) ABC の再評価

昨年度評価以降追加されたデータセット	修正・更新された数値
2013 年漁獲量確定値	2013 年漁獲量の確定（暫定値と同値）
2014 年漁獲量暫定値	2014 年漁獲量の追加

評価対象年 (当初・再評価)	管理基準	資源量	ABCLimit (トン)	ABCtarget (トン)	漁獲量 (トン)
2014 年 (当初)	1.0・Cave3-yr・1.00	—	803	642	
2014 年 (2014 年再評価)	1.0・Cave3-yr・1.00	—	803	642	
2014 年 (2015 年再評価)	1.0・Cave3-yr・1.00	—	803	642	594
2015 年 (当初)	0.7・Cave3-year・1.05	—	513	410	
2015 年 (2015 年再評価)	0.7・Cave3-year・1.05	—	513	410	

2014 年 (当初) の ABC 値は、平成 26 年 7 月 4 日に訂正された ABC 算定のための基本規則に基づき評価した。2013 年の漁獲量の確定値は暫定値と同値であったため、ABC に変更はない。

6. ABC 以外の管理方策

熊野灘では、1 そうびき沖底の漁獲努力量は 2014 年に前年比で約 4 割減少したものの過去 5 年の推移からみればほぼ横ばいとなっているにも関わらず、資源密度指数は減少傾向を示している。このことは、漁獲以外の要因が本系群の動向を左右している可能性を示唆しており、レジームシフトなどの環境要因との関連を調べていく必要がある。

7. 引用文献

- Fujita T., Inada T. and Ishito Y. (1993) Density, Biomass and Community Structure of Demersal Fishes off the Pacific Coast of Northeastern Japan. J. Oceanogr. 49, 211-229.
- 羽生 功(1956) ニギス *Argentina semifasciata* KISHINOUE の年令及び成長に就て. 日水誌, 21(9), 991-999.
- 堀川博史・阪地英男(1996) 農林水産系生態秩序の解明と最適制御に関する総合研究. 平成 7 年度報告. 底魚群集における大陸棚縁辺部成育場の役割の解明, 226-227.
- 堀川博史・通山正弘・玉井恭一・坂本久雄(1992) 農林水産系生態秩序の解明と最適制御に関する総合研究. 平成 3 年度報告, 環境傾度分析による底魚類の棲み場をめぐる種間相互作用の解明, 234-235.
- 片山知史・梨田一也(2010) ニギス耳石の年輪構造. 黒潮の資源海洋研究, 11, 85-88.
- 三尾眞一(1969) 日本海産ニギス(*Glossanodon semifasciatus* (KISHINOUE))の年令・成長および成熟. 日水研報告, 21, 1-16.
- Nashida K., Sakaji H. and Honda H. (2007) Spawning seasons of adult and growth of 0-year-old deepsea smelt *Glossanodon semifasciatus* in Tosa Bay, Pacific coast of Shikoku. Bull. Jpn. Soc. Fish. Oceanogr., 71 (4) , 270-278.
- 梨田一也(2010) 土佐湾におけるニギス幼魚の耳石日周輪. 黒潮の資源海洋研究, 11, 89-94.
- 梨田一也(2013) 土佐湾におけるニギス幼魚の発生時期と初期成長. 平成 25 年度日本水産学会春季大会講演要旨集, 49.
- 尾形哲男・伊東 弘(1979) 日本海産ニギス *Glossanodon semifasciatus* (KISHINOUE)成長の

吟味. 日水研報告, 30, 165-169.

Sinoda, M. and S.D. Jayasinghe (1971) Possibility of race separation of “Nigisu” by means of otolith. Bull. Jpn. Soc. Sci. Fish. 37, 1140-1149.



図1. ニギス太平洋系群の分布

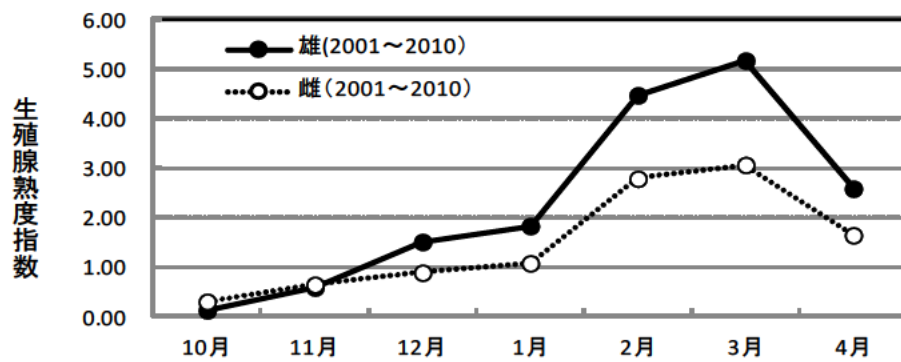


図2. ニギスの生殖腺熟度指数（KG 値）の過去10年間
（2001年～2010年）の月別平均値

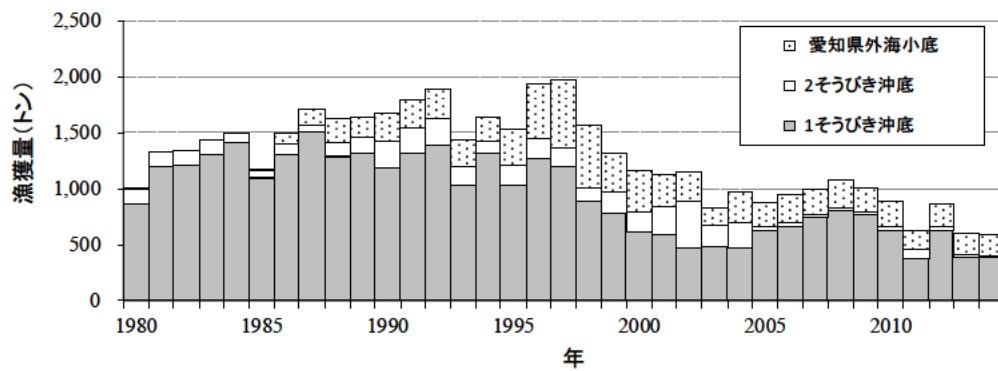


図3. ニギス太平洋系群の漁獲量の経年変化

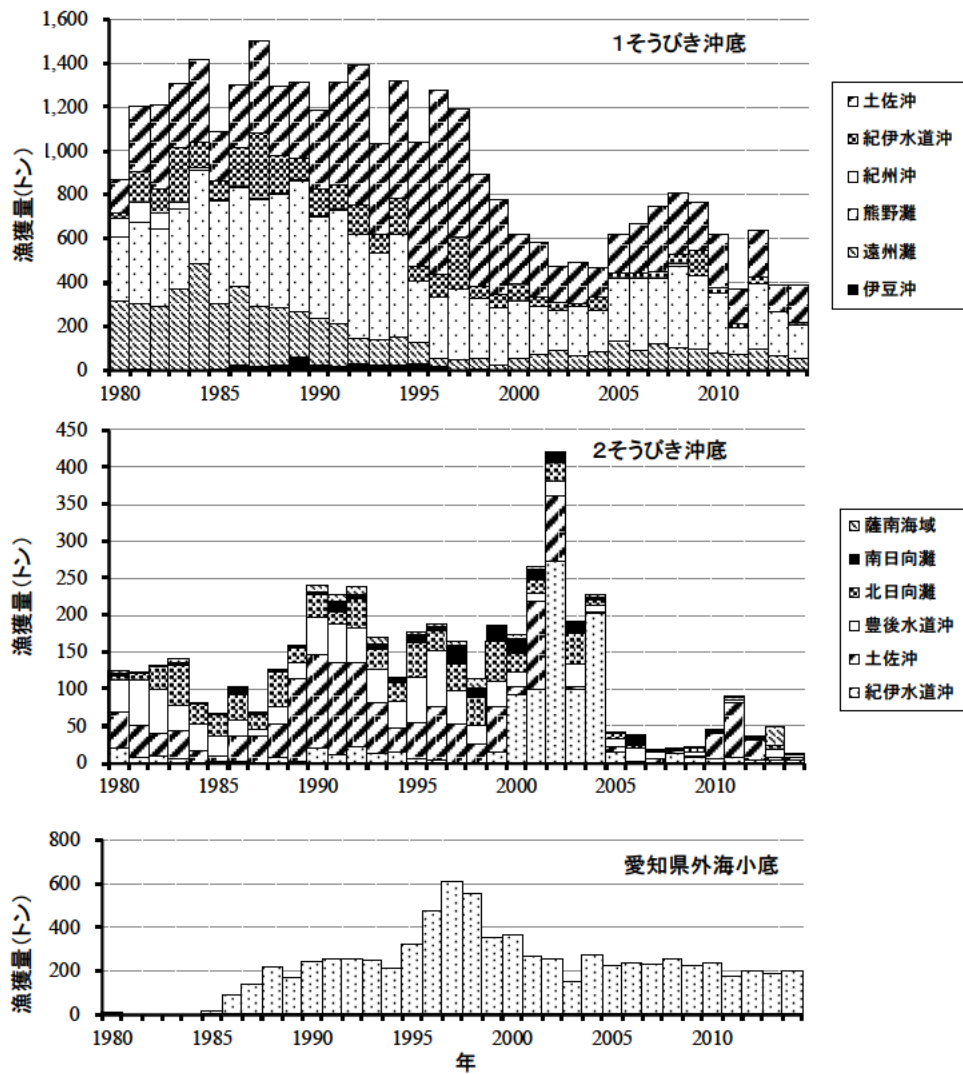


図 4. 太平洋中部・南部における小海区別漁業種類別漁獲量の経年変化

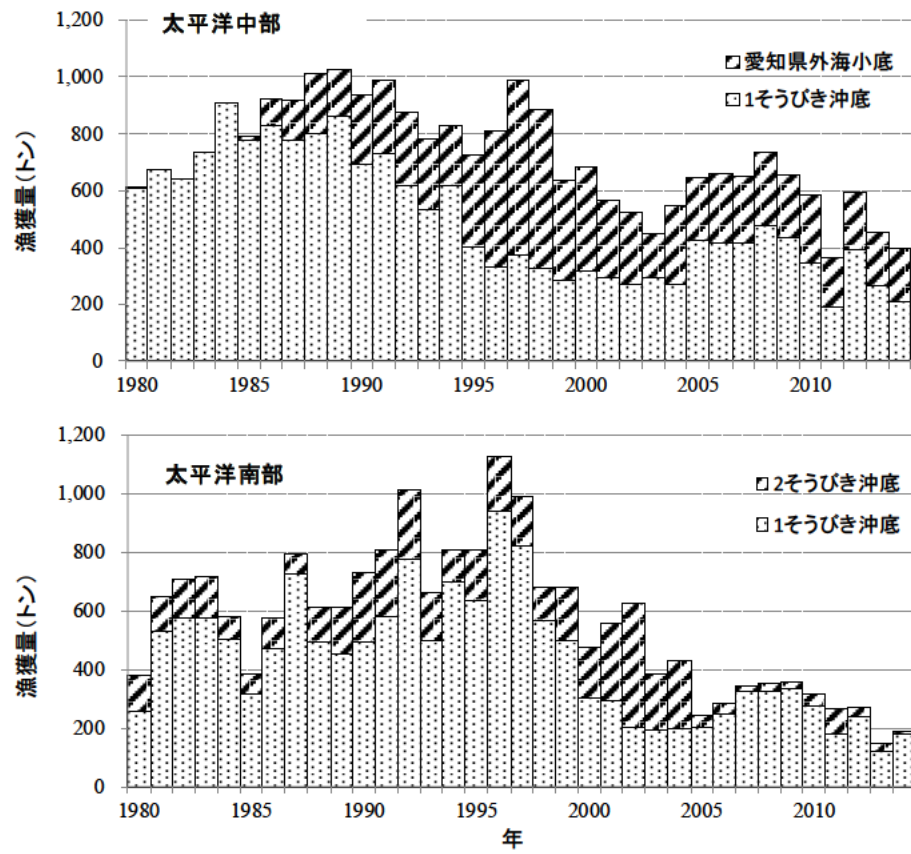


図 5. 太平洋中部・南部におけるニギスの漁業種類別漁獲量

ニギス太平洋系群－11－

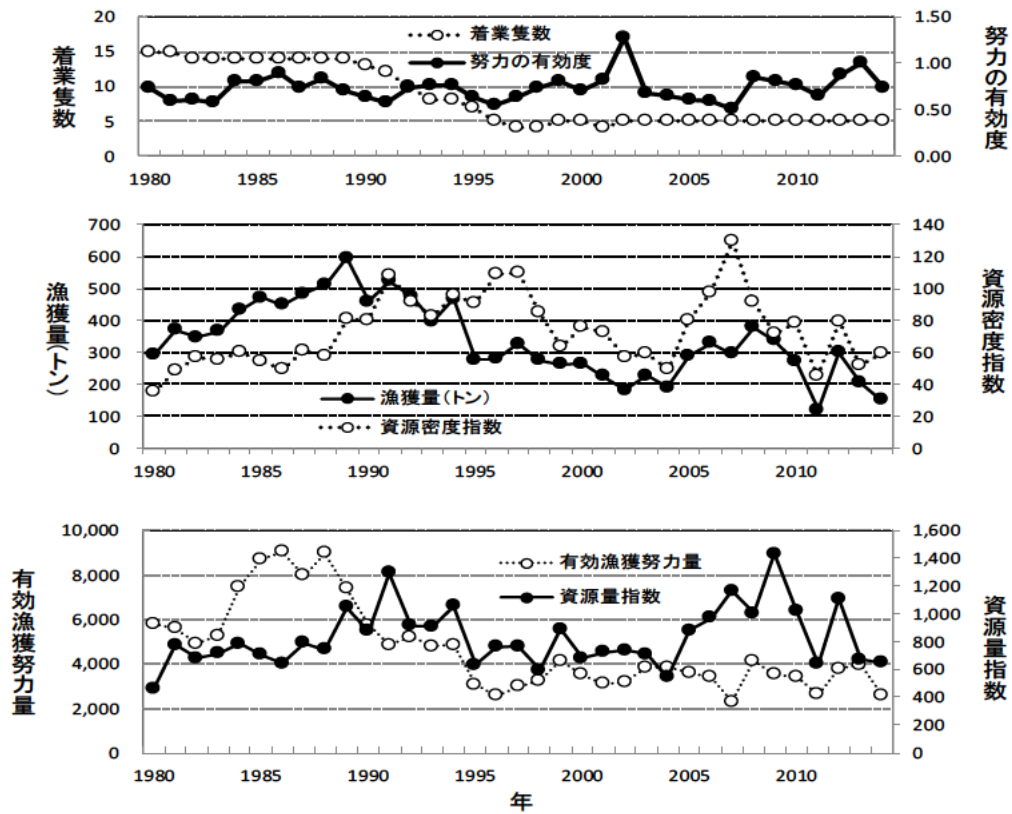


図 6. 熊野灘の 1 そうびき沖底の漁獲量、資源量指数等の統計値の経年変化

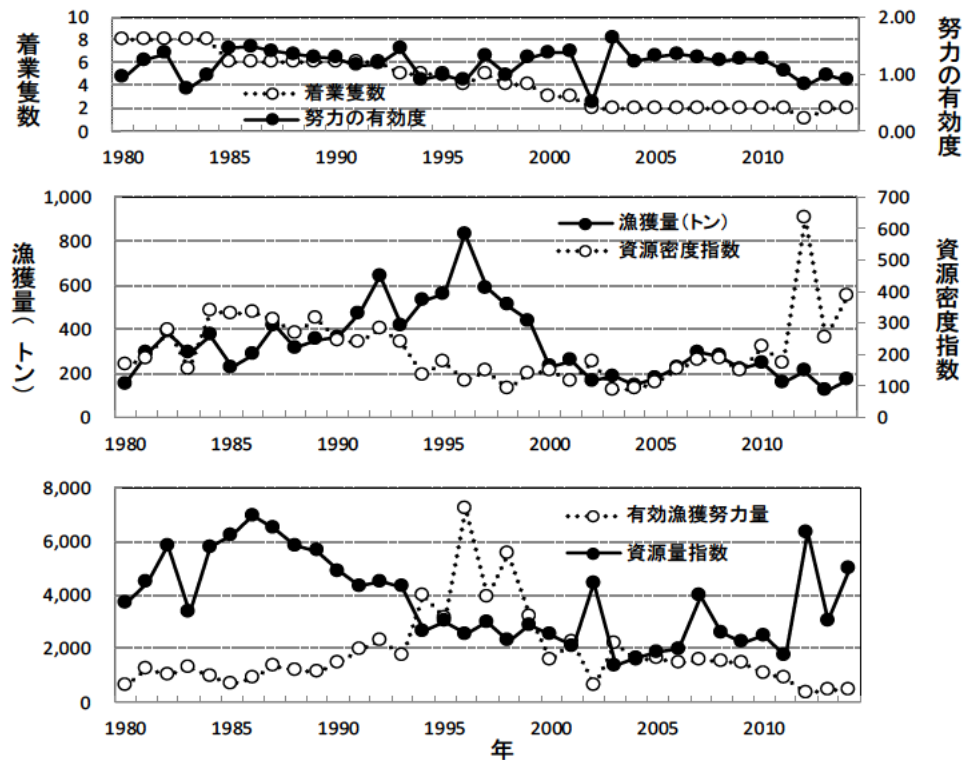


図 7. 土佐沖の 1 そうびき沖底の漁獲量、資源量指数等の統計値の経年変化

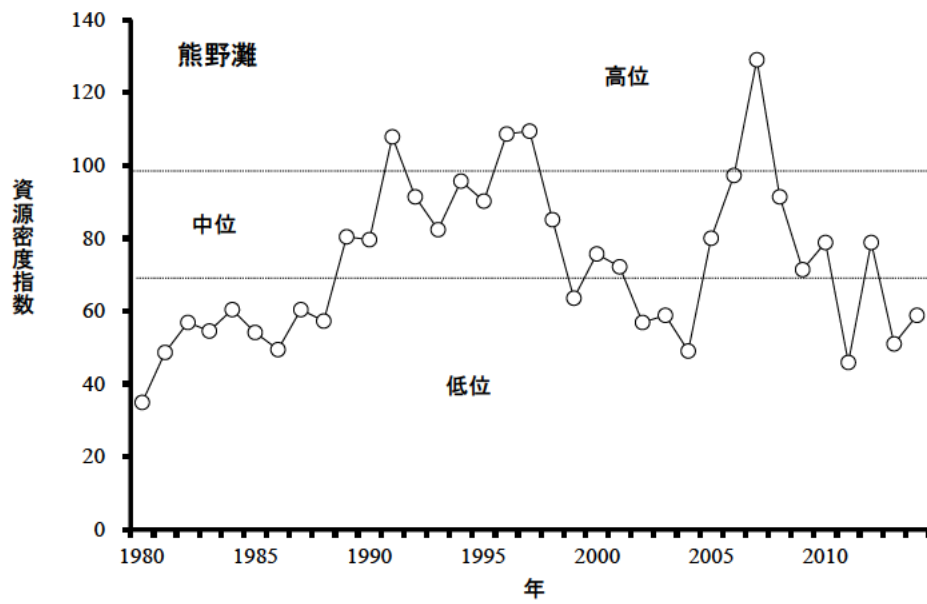


図 8. 熊野灘における1そうびき沖底によるニギスの資源密度指数の推移

表 1. 日本周辺におけるニギスの年齢（満年齢）と被鱗体長（mm）の関係

著者	発生時期	1	2	3	4	5	調査海域
羽生 (1956)		130-150	170-190				熊野灘、 紀伊水道沖
三尾 (1969)	春生れ	91	161	209			新潟沖
	秋生れ	92	154	197			
Sinoda and	春生れ	74	132	158			京都沖
Jayashinghe (1971)	秋生れ	101	144	166			
尾形・伊東 (1979)	春生れ	51	145	180	198	211	新潟沖
	秋生れ	110	166	189	204	215	
Nashida et al. (2007)	春生れ	130-140					土佐湾

表 2. ニギス太平洋系群の漁業種別漁獲量（トン）

年	1そうびき沖底	2そうびき沖底	愛知県外海小底	海域計
1980	871	123	1	996
1981	1,201	120	0	1,321
1982	1,214	130	0	1,344
1983	1,308	140	0	1,448
1984	1,413	79	0	1,493
1985	1,095	68	15	1,178
1986	1,302	101	88	1,491
1987	1,504	69	139	1,712
1988	1,292	125	215	1,631
1989	1,313	158	168	1,639
1990	1,186	242	241	1,669
1991	1,313	228	256	1,796
1992	1,396	239	257	1,892
1993	1,030	170	247	1,447
1994	1,316	115	209	1,641
1995	1,038	178	319	1,535
1996	1,271	188	476	1,936
1997	1,195	166	616	1,977
1998	893	113	559	1,565
1999	782	186	350	1,318
2000	621	172	364	1,157
2001	584	265	270	1,119
2002	474	419	254	1,147
2003	489	191	153	833
2004	472	229	273	974
2005	625	39	224	888
2006	668	34	239	941
2007	747	18	230	995
2008	807	20	258	1,085
2009	768	21	221	1,010
2010	622	44	235	901
2011	370	90	172	632
2012	633	33	201	867
2013	390	24	185	599
2014	386	12	196	594

出典：太平洋中部・南部沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計年報、農林水産省統計部
 漁業・養殖業生産統計年報より（2014 年は暫定値）。

表 3. 太平洋中部・南部海域における漁業種類別漁獲量の経年変化（トン）

年	太平洋中部			太平洋南部		
	1そうびき沖底	愛知県外海小底	中部計	1そうびき沖底	2そうびき沖底	南部計
1980	612	1	613	259	123	383
1981	673	0	673	529	120	650
1982	638	0	638	576	130	706
1983	733	0	733	576	140	716
1984	912	0	912	501	79	580
1985	775	15	790	319	68	387
1986	831	88	919	471	102	573
1987	778	139	917	726	68	794
1988	799	215	1,014	492	125	617
1989	860	168	1,028	454	158	612
1990	696	241	937	490	241	731
1991	731	256	987	581	228	809
1992	620	257	877	776	238	1,014
1993	535	247	782	496	169	665
1994	622	209	831	695	116	811
1995	406	319	725	633	177	810
1996	333	476	809	939	188	1,127
1997	371	616	987	824	166	990
1998	326	559	885	566	114	680
1999	285	350	635	495	186	681
2000	319	364	683	303	173	476
2001	292	270	562	293	265	558
2002	271	254	525	203	419	622
2003	294	153	447	196	191	387
2004	274	273	547	199	228	427
2005	422	224	646	203	40	243
2006	421	239	660	248	35	283
2007	418	230	648	328	18	346
2008	479	258	737	329	21	350
2009	433	221	654	335	21	355
2010	348	235	583	276	43	319
2011	192	172	364	178	89	267
2012	393	201	594	239	33	272
2013	267	185	452	123	24	147
2014	205	196	401	180	12	192

2014 年は暫定値。

表 4. 熊野灘における 1 そうびき沖底の漁獲量, 資源量指数等の統計値

年	漁獲量(トン)	着業隻数	資源密度指数	資源量指数	有効漁獲努力量	努力の有効度	有漁漁区数
1980	294	15	35	456	5,794	0.73	13
1981	369	15	49	777	5,574	0.59	16
1982	347	14	57	682	4,900	0.60	12
1983	365	14	55	712	5,266	0.57	13
1984	431	14	60	786	7,453	0.80	13
1985	470	14	54	703	8,695	0.80	13
1986	448	14	50	645	9,016	0.89	13
1987	483	14	61	788	7,972	0.73	13
1988	513	14	57	744	8,975	0.84	13
1989	595	14	81	1,048	7,382	0.71	13
1990	458	13	80	877	5,745	0.64	11
1991	522	12	108	1,293	4,847	0.58	12
1992	475	10	91	914	5,191	0.73	10
1993	396	8	83	908	4,803	0.76	11
1994	466	8	96	1,054	4,862	0.76	11
1995	276	7	90	632	3,055	0.63	7
1996	279	5	109	760	2,569	0.55	7
1997	326	4	110	767	2,970	0.64	7
1998	275	4	85	596	3,233	0.74	7
1999	263	5	64	891	4,133	0.81	14
2000	265	5	76	681	3,503	0.70	9
2001	224	4	72	723	3,097	0.82	10
2002	181	5	57	740	3,177	1.27	13
2003	227	5	59	709	3,836	0.67	12
2004	189	5	49	542	3,827	0.65	11
2005	289	5	80	882	3,606	0.61	11
2006	329	5	97	971	3,386	0.59	10
2007	295	5	129	1,163	2,284	0.50	9
2008	377	5	91	1,004	4,131	0.85	11
2009	336	5	72	1,432	3,518	0.81	20
2010	271	5	79	1,023	3,438	0.76	13
2011	119	5	46	637	2,612	0.65	14
2012	299	5	79	1,109	3,779	0.87	14
2013	204	5	51	669	3,962	1.00	13
2014	151	5	59	648	2,568	0.74	11

出典：太平洋中部・南部沖合びき網漁業漁場別統計年報。

表 5. 土佐沖の 1 そうびき沖底の漁獲量、資源量指数等の統計値

年	漁獲量(トン)	着業隻数	資源密度指数	資源量指数	有効漁獲努力量	努力の有効度	有漁漁区数
1980	153	8	167	3,679	607	0.94	22
1981	293	8	187	4,482	1,221	1.24	24
1982	387	8	278	5,847	1,027	1.35	21
1983	292	8	152	3,349	1,266	0.73	22
1984	373	8	340	5,773	955	0.97	17
1985	228	6	327	6,218	697	1.45	19
1986	285	6	332	6,970	899	1.48	21
1987	417	6	308	6,471	1,353	1.40	21
1988	314	6	266	5,852	1,181	1.34	22
1989	351	6	314	5,647	1,117	1.29	18
1990	362	6	245	4,890	1,479	1.28	20
1991	470	6	240	4,319	1,959	1.15	18
1992	643	6	281	4,491	2,291	1.17	16
1993	412	5	239	4,302	1,722	1.44	18
1994	528	5	133	2,660	3,972	0.90	20
1995	560	5	177	3,012	3,159	0.97	17
1996	831	4	115	2,524	7,245	0.89	22
1997	587	5	150	2,997	3,919	1.30	20
1998	508	4	92	2,289	5,547	0.97	25
1999	438	4	137	2,870	3,207	1.28	21
2000	230	3	147	2,507	1,557	1.37	17
2001	256	3	116	2,080	2,216	1.38	18
2002	164	2	178	4,441	629	0.51	25
2003	186	2	85	1,363	2,178	1.63	16
2004	144	2	91	1,638	1,580	1.21	18
2005	179	2	109	1,853	1,641	1.31	17
2006	227	2	153	1,984	1,487	1.34	13
2007	295	2	181	3,977	1,555	1.29	22
2008	278	2	186	2,597	1,501	1.22	14
2009	221	2	149	2,241	1,480	1.26	15
2010	246	2	226	2,491	1,084	1.25	11
2011	158	2	174	1,739	910	1.05	10
2012	209	1	634	6,339	329	0.81	10
2013	121	2	253	3,037	479	0.98	12
2014	168	2	384	4,991	437	0.88	13

出典：太平洋中部・南部沖合底びき網漁業漁場別統計年報。

補足資料1 資源評価の流れ

